

提言 日本の国名を「NIPPON」に

森 一郎

昨年、令和3（2021）年に開催された東京オリンピック・パラリンピック（以下、東京オリ・パラ）は、コロナ感染で開催の是非が問われ騒がれたにも関わらず、既に過去の話となってしまう、私たちの記憶から忘れ去られようとしている。本当に月日の経つのは早いものである。

ところで、NHK では東京オリ・パラを盛り上げようと、令和元年に大河ドラマ「いだてん」を放映した。「いだてん」では、ストックホルムオリンピックに日本初の代表選手として出場し、「マラソンの父」といわれた金栗四三^{かほ}を中心に話が展開している。

この大河ドラマの中で、日本の国名に関する興味深いエピソードが紹介されている。それは開会式のプラカードの国名をどう表記するかという問題である。日本選手団としては、世界に通用している「JAPAN」にしようとした。しかしプラカードを担当する金栗は「俺は JAPAN 人じゃなく、日本人だ」といって「日本」という表記にこだわった。日本選手団の監督である大森兵蔵^{おおもりひょうぞう}は「読めなきゃ意味がないんだよ。東洋の日本が、国際大会に参加することを、世界の人々に知らせる必要があるんだ」と言って説得しようとした。しかし金栗は「『日本』でお願いします。そうでなければ私は出ません」とまで言って平行線をたどっていた。その時、黙って聞いていた金栗の恩師でもある嘉納治五郎^{かののうじごろう}が筆を取り、提案したのが「NIPPON」という表記であり、結局これが採用された。当時の写真をみると「NIPPON」という文字をはっきり見ることができる。

つまり、我が国のオリンピックへの参加は「NIPPON」という国名で始まったのである。



写真1 「NIPPON」のプラカードをもつ金栗四三。なお旗手として国旗をもっているのは陸上競技で出場した三島弥彦。
みしまやひこ

ところで、よく知られているように、我が国の英語の呼称である「JAPAN」は、マルコ・ポーロの旅行記である『東方見聞録』の中で「黄金の国・ジパング」と書かれていたことに淵源があるとされている。このジパングについては、中国で日本のことを「ジッポン」と発音していたことをマルコ・ポーロが「Zipangu」と表現したことからきていると言われている⁽¹⁾。フランス語の「ジャポン」やドイツ語の「ヤーパン」も同じ由来である。つまり我が国を表す「JAPAN」は、日本人自らがつけた国名ではなく、極端に言えば、いわば外国から「押し付けられた国名」だともいえる。

実は、この外国から「押し付けられた国名」は古代の日本でも同じ事情があった。周知のように、我が国は、古代では「倭」と呼ばれていたが、

(1) 当時の中国では「日」を漢音で「ジツ」と読んでいた。現在の日本でも休日、祭日、元日などは「日」を「ジツ」と読んでおり、「日本」を「ジッポン」と発音されていたのをマルコ・ポーロが「Zipangu」と書き記したといわれている。

これは当時の中国が日本に対して名付けたことからきている。中国の歴史書である『魏志倭人伝』などの書物にも「倭」という言葉が使われている。中国は、現在でもそうだが、自分たちの国は全世界の中心に位置するという中華思想の考え方をもち、中国の周辺の国々は全て野蛮な、下等な国であると考えている。したがって周辺の国々に対しては虫や、動物、あるいは卑しい言葉を使って表している。たとえば「蒙古」（無知で愚鈍）、「匈奴」（不吉な野郎）、「鮮卑」（明らかに卑しい）などである。我が国においても「邪馬台国」（^{よこしま}邪な馬のいる国）、「卑弥呼」（^{べつしやう}卑しい女性）など蔑称を用いて表している。「倭」という国名も同様に蔑称なのである。「倭」という漢字は、人偏に^{ゆだ}委ねると書かれるが、委ねるとは相手に任せる、寄りかかるという意味で、そこから曲がっているとの意味も含まれている。つまり「倭」という言葉は「腰の曲がった背の低い人」という意味で、「矮」（^{わい}背が低い）と同系で相手を^{おとし}貶める言葉である。

そのことに気づいた日本人が、我が国に^{ふさわ}相応しい名前として自ら名づけたのが「日本」という呼称である。命名のきっかけの一つが、聖徳太子が中国（隋）に送った国書の中で日本を「日出づる^{ところ}処の国」と表現したところからきていると言われている。「日」は太陽のことであり、「本」は～の元ということで、中国から見れば東の日本は太陽が昇る元の国だ、という意味で「日本」としたのである。そのことから「日本」は和訓読みで「^{ひのもと}日本」ともいわれる。そして7世紀末の天武天皇の時代に、この「日本」という国名が正式に表明されたのである⁽²⁾。それから約1300年を経た今日まで「日本」という国名は変わることなく使われている。世界の大半の国は、他国からの侵略のためや王朝が変わったため、国名が変化しているが、世界で最も永く国名が変わっていないのが「日本」だと言える。

(2) なお先に述べた「倭」であるが、「倭」という漢字に代わってその後、同じ発音である「和」という漢字が使われるようになり、これが今日まで日本を表す言葉の一つとして使われている。たとえば「和室」、「和食」、「和服」、「和歌」などである。さらに日本を「大いなる和の国」という意味で「大和」と^{やまと}表す場合がある。また日本の文化のことを「和文化」ともいっている。

ところで、よく問題にされるのが「日本」を「ニホン」と読むのか、「ニッポン」と読むのか、どちらなのかという点である。結論から言えば、政府の見解としては「どちらでもよい」とのことである。ちなみに「ニホン」と読むのは、日本大学、日本航空、日本経済新聞、日本たばこ産業、日本交通、日本アイ・ビー・エム、日本マクドナルドなどである。反対に「ニッポン」と読むのは、日本銀行、ニッポン放送、日本武道館、近畿日本鉄道、日本体育大学、日本郵便、日本電気 (NEC)、日本電信電話 (NTT)、日本通運、日本ハムなどである。我々の馴染みのある日本銀行券 (紙幣) や郵便切手には、しっかりと「NIPPON」と表記されている。面白いのは政党の名前で、「ニホン」と読ませているのは、日本共産党 (1922-)、日本民主党 (1954-1955)、日本新党 (1992-1994) など、反対に「ニッポン」と読ませているのは、日本社会党 (1945-1996)、新党日本 (2005-2015)、たちあがれ日本 (2010-2012)、日本維新の会 (2012-2014, 2016-) などで、それぞれ読み方が異なっている。また東京と大阪にある橋の名称と地名になっている日本橋は、東京の日本橋は「ニホンバシ」であり、大阪の日本橋は「ニッポンバシ」とそれぞれ読まれている。

このように読み方は「ニホン」と「ニッポン」と二通りあるが、ニホンはどちらかと言えば「静的」な響きがあるのに対して、ニッポンは破裂音が入っているため「動的」な響きがある。そのためスポーツなどの大会では、どうしても「ニッポン がんばれ」となるわけで、「ニホン がんばれ」とは言わないし、間違っても「ジャパン がんばれ」とは、言わないのである。日本人の心性からすると「ニホン」という落ち着いた表現なども良いかと思われるが、やはり躍動感あふれ、活動的であり、さらに将来の発展も感じられる表現である「ニッポン」が相応しいのではないだろうか。

したがって、結論的には日本についての対外的表記は「NIPPON」が良いと思われる。

さて、「日本」の国名を「NIPPON」とすることについては以上述べた理由と同時に、「国旗」との整合性もある。日本の国旗は「日の丸」とも言われ、真ん中の赤い丸は太陽を表している。「日本」である日本が、太陽を中

心に据えた国旗をもつことと、「NIPPON」という国名をもつこととは整合性がある。さらに言えば、日本の歴史書であり、神話についても書かれている『古事記』の中に登場する天照大神^{あまてらすおおみかみ}は、太陽の神であり天皇の祖先でもある。日本では太陽は最高の神であり、国旗はそれを象徴している。

したがって、日本の国名を外国向け表記として「NIPPON」とすることについては、日本の歴史の上からも、国旗との関係からも、また神話や日本の象徴である天皇との関係からいっても、いずれの点からも対外的に十分正当性と説得性をもつのである。また「NIPPON」という表現は、日本の歴史を踏まえたものであり、それだけに日本人自らが日本の歴史を深く意識することにもつながる。

最後の課題として、何時^{いつ}、日本の対外的表記を「NIPPON」にするかである。区切りがよい年としては、今上陛下の在位 10 年にあたる令和 10 (2028) 年ではどうだろうか。しかしながら 6 年後のこともあり、国内で新国名を周知させ、対外的にも理解を得られるためには、少し時間が短いようにも思われる。であれば、さらに 10 年後である令和 20 年に国名を「NIPPON」とすることも考えられる。

話を最初に戻すが、昨年（令和 3 年）のオリンピックは、前回の東京オリンピックから約 60 年後に開催されている。日本で次にオリンピックが開催されるとしても、早くても半世紀先になると思われる。その時、昭和 23 年生まれの筆者は、この世には存在しないことは確実であるが、来年、後期高齢者の仲間入りをする筆者としては、その時「NIPPON」と書かれたプラカードを持つ選手団の入場する姿を、あの世からでも是非とも見たいものだと思っている。

【参考文献】

吹浦忠正（2013 年）『世界の国旗ビジュアル大事典第 2 版』学研教育出版。

神野志隆光（2016 年）『「日本」国号の由来と歴史』講談社学術文庫。

木村尚三郎監修（2000 年）『新版 日本のすべて [英文対訳]』三省堂。

松岡正剛（2014年）『にほんとニッポン』工作舎。

松岡正剛（2020年）『日本文化の核心』講談社現代新書。

NHK（2019年）『NHK大河ドラマ・ガイド いだてん 前編』NHK出版。

大和岩雄（1996年）『「日本」国はいつできたか』大和書房。

杉山徹宗（1999年）『中国4000年の真実』祥伝社。

辻原康夫監修（2014年）『新版 国旗と国名由来図典』出窓社。